

〈論文〉

山田潤の教育と労働に関する問題意識 『ハマータウンの野郎ども』と不登校を中心に

田中 佑弥

はじめに

本稿では、『ハマータウンの野郎ども』（Willis 1977 = 1985）を翻訳し、「学校に行かない子と親の会（大阪）」を立ち上げた山田潤の経歴を紹介し、彼が教育と労働についてどのような問題意識を持っていたかを考察する¹。そして、訳者である山田の視点を踏まえ、社会学における重要文献である『ハマータウンの野郎ども』をどのように読むことができるかを考察する²。

山田の略歴は以下の通りである。1948年、岡山県新見市生まれ。1952年に大阪府寝屋川市に移り、1971年に京都大学文学部を卒業後、職業訓練校に1年間通い、板

1 筆者は「学校に行かない子と親の会（大阪）」の定例会に参加した2010年から山田と面識があり、筆者が武庫川女子大学教育研究所に勤務していた折には同学において講演を依頼するなど、山田と対話する機会を得ることができた。

また、NPO法人全国不登校新聞社が2016～2018年に実施した「不登校50年証言プロジェクト」には共に委員として参加した。「不登校50年証言プロジェクト」の目的は、1966年に学校基本調査によって不登校（学校ぎらい）の調査が始まって50年になるのを機に、不登校経験者、親の会・フリースクール関係者、医師、教員、研究者など、さまざまな人びとの声をアーカイブすることであった。山田へのインタビューも行われており、筆者はインタビュアーの一人として参加している。詳細は同プロジェクトのウェブサイトを参照。<http://futoko50.sblo.jp/>

2 本稿は山田の了承を得て2017年7月1日に日本子ども社会学会第24回大会（東京学芸大学）にて行った報告「山田潤の教育と労働に関する問題意識——『ハマータウンの野郎ども』「学校に行かない子と親の会（大阪）」を中心に」を基にしている。

金工場に就職。1977年に転職し、大阪府立工業高校定時制課程に英語科教員として勤務。その傍ら1991年には「学校に行かない子と親の会（大阪）」を立ち上げ、学校に行かない子どもの保護者が語り合う場を継続して開いてきた。また、『ハマータウンの野郎ども』のほか『大英帝国の子どもたち』（Humphries 1981 = 1990）、『匪賊』（Billingsley 1988 = 1994）を翻訳している。2022年7月16日、死去。

1 京都大学から板金工場へ

山田の人生における重要な転機の一つは、京都大学文学部を1971年に卒業した後、松原専修職業訓練校（大阪府）に入校したことである³。山田は、当時をつぎのように振り返っている。

卒論を書いていた当時、私は「哲学の散歩道」に面した下宿に住んでいました。吉田山を越えて京大まで30分ぐらいの道のりで、実に風光明媚なよいところでした。ちょうど「哲学の散歩道」がアンアン族、ノンノ族の脚光を浴びはじめる時期で、おそらく京都市も観光地として整備しようとしたんでしょうね。疎水沿いのひなびた散歩道だったんですけども、古い木製の電信柱をコンクリート製の新しいものに取りかえる工事が始まっていました。卒論を書きあぐねていた私は、その電柱の取りかえ作業を下宿の窓からよく眺めていました。電気工事士は、ガンベルトみたいなやつにいっぱい工具をぶら下げてるんですが、そのベルトを外して、倒したばかりの電柱にみんなで腰かけて弁当を食べてるんですね。また、こっちの電柱に登って電線を結び、声をかけ合いながらあっちの電柱とのあいだに電線を張っていくという作業を見ていて、私はこういう仕事を自分でもやってみたいと思ったのです。⁴

松原専修職業訓練校には電気工学科もあったが、山田はより魅力を感じた板金工科を選択し、そこで1年間、中卒や高校中退の若者たちとともに板金を学んだ。

3 以下の山田の経歴に関する記述は主に、武庫川女子大学教育研究所で開催された2016年度第2回臨床教育研究懇談会（2016年10月1日、武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科主催）における山田の講演を参照した。なお講演の概要は、山田（2017）としてまとめられている。

4 2016年度第2回臨床教育研究懇談会における山田の発言。



松原専修職業訓練校における山田潤（同氏提供）

上掲写真で山田が腕を掛けているのは柱上トランスである。山田は「大学を去ってどうしようかと思っていたときに、改修中の哲学の散歩道で電気工事士たちが電柱に取りつけ直していたのがやっぱりこの柱上トランスだったんです。職業訓練校の板金工科で訓練用のトランスを造る責任者に私になったわけで、おもしろいめぐり合わせですよね。こういうトランスの模型を5本ほど造って、塗装科で錆止めの塗料を塗った模型を電気工事科の生徒が実際に担いで電柱に上る姿なんかもこの目で見ました」⁵と振り返っている。中卒や高校中退の少年たちとともに職業訓練に臨む経験は、山田につきのような影響を与えることになった。

大学教育まで受けることによって私はいったい何を得たのか、あるいは、何を失ったのか。この子たちは高・大と進むことなく、1年間の職業訓練を受けて職場に入っていくわけですが、高・大に行かないことによって何を失ったのか、あるいは、何を得るのか。そんなことを真剣に考えるようになりました。思い返せば、私が中学校を卒業するときにも、高・大へと進まずにすぐ働きに出た同級生、仲のよい友達もいたわけです。彼らの想いはどうだったろう、ということを考えるきっかけにもなりました。⁶

『ハマータウンの野郎ども』への着目の根底には、このような山田の個人的経験があると考えられる。山田は1972年に職業訓練校を修了し、大阪の吉田板金工作所に

5 同上。

6 同上。

就職した。

日本社会臨床学会での記念講演（2011年）において山田は、彼の1970年代のブックリストを公開している（山田2011, p.56）。山田が板金工場に就職した1972年前後には、中岡哲郎『工場の哲学』（平凡社、1971年）、シモーヌ・ヴェイユ『工場日記』（講談社、1972年）、鎌田慧『自動車絶望工場』（現代史出版会、1973年）などが出版されており、同時代に工場や労働が注目されていたことが伺える。当時を山田は、つぎのように振り返っている。

金属加工の実際に触れると、私たちの暮らしを支えているいろんなものに目が行くようになるんですね。高速道路などの工事現場で、パチパチ火花を散らしている電気溶接の光景、また、その溶接のできぐあいなんかにも目が止まるようになります。喫茶店に入るとミルクを注ぐ小さなカップがありますよね。あれもよく見ると、持ち手がスポット溶接で本体にとめられた跡がついてるんですよ。そういう細かいものまで目に入ってくる。私たちの暮らしを支えているものたちが、どんな人たちのどういう労働によってつくられているのか。そういうことがやっとこのころ目に見えてくるようになったのです。……鉄板がどれほど加工性にすぐれているか。どんな加工技術があり、工員たちのどんな技能によって加工されているか。⁷

山田は、板金という「手の労働」から多くを学んだ⁸。なお、山田は『ハマータウンの野郎ども』で manual labour を「手の労働」と訳している。この点については、つぎのように述べている。

普通は「筋肉労働」とか「肉体労働」と訳すのですが、私は文字通り「手の労働」としました。……手足を十分に動かす仕事に就くことで大いに救われたという想いが私には強いのです。大学で専攻したのはドイツ近現代史でして、19世紀後半のドイツの工業化が卒論のテーマだったのですが、確かな手応えはぜんぜんえられませんでした。自分で書いていることはみんな作り話ではないか、史料を正確に読むとはどういうことか、などと考え詰めると気が変になりそうなきががありました。

7 同上。

8 この点については山田（1977）で詳述されている。

その種の悪戦苦闘のことを思えば、さっきお見せしたような工具を使って具体的に鋼板を切ったり曲げたり溶接したりして、図面に描かれたものが目の前で姿を整えていく、そんな仕事を持つことの、精神の安定にとっての重要さみたいなことをつくづく思い知るのですね。そういう経緯があって、「筋肉労働」ではなく「手の労働」と訳したのです（山田 2016, p.50）

2 『ハマータウンの野郎ども』と定時制工業高校の若者たち

山田は5年間の工場勤務を経て、1977年に大阪府立工業高校定時制課程に転職した。奇しくもこの年に『ハマータウンの野郎ども』の原著が出版されている。山田は「生徒たちと向き合いながら、80年代の前半にこの翻訳にとりかかっていたのです。イギリスのセカンダリー・モダン校の、やんちゃな生徒たちとたいして異なることのない生徒たちが、日本の私の目の前にいたのです」（山田 2016, p.49）と述べている。

なお『ハマータウンの野郎ども』は熊沢誠（甲南大学名誉教授・労働社会学）との共訳になっているが、実質的には山田による翻訳である。熊沢は、つぎのように述べている。

本当に偶然に、山田さんと私が同じ頃別々に読みました。私は大きな示唆を受け翻訳してはどうかと思ったのですが、この原書の英語はとても難しくてね、これはもう山田君しかできないと思い、その前提で筑摩書房に話を持ちかけたのです。いちおう「共訳」というかたちですが、率直なところこれはすべて山田潤の仕事で、私は名前を貸して、訳文の日本語をちょっと手直ししただけです。（熊沢 2016, p.60）

山田は『ハマータウンの野郎ども』に着目した理由をつぎのように述べている。

私が『ハマータウンの野郎ども』に興味を持ったのは、一刻も早く学校からおさらばして、大人の味がする職場に出たいというのが、イギリスの、あまり勉強が好きじゃないやんちゃな少年たちの望みなんだという、そのところですね。イギリスの当時の社会には、「さっさと学校なんかやめて働きに出たほうがよっぽどいいよ」と、その子たちを支える大人の側の構えもあったのです。戦後の日

本は急速にそういう対抗文化を失っていったのです。⁹

山田によれば、かつての日本の定時制高校には正社員として働き、職場での学びによって成長する生徒たちが多くいたが、製造業の衰退とともにそのような生徒たちは少なくなり、次第に不登校経験のある生徒が彼の勤務する定時制課程に進学してくるようになった。この経緯について、つぎのように述べている。

若い先生が工事費用の見積もりにかかわって「積算」ということを教えていますと、「センス、そんな積算やってたら仕事にならへんで。そんなことやってたら工務店は破産やわ」などと言いはじめる生徒が出てくるのです。職員室に帰ってきて、「授業で生徒にこんなこと言われたんやけど、どうなんやろ」といって教員たちで話し合うというような、非常におもしろいことがいくらかでもあった。

そういうことが定時制高校のなかからどんどん消えていって、逆に小学校や中学校で不登校して全日制高校には行けないので、仕方なく、ほんとうは定時制高校なんかに来たくないんだけど、親や先生に勧められて入学して来る生徒が目立ってきます。

教員たちの側でも、定時制高校の統廃合に反対して、就学促進に力を入れるようになり、さかんに中学校訪問をやりはじめる。いじめられて不登校気味になっていた生徒にも夜間に通学する道もあると勧めたりするのです。

そういう活動のなかで、非常にしんどい生徒の状況に私も目が向くようになりました。9年間の義務教育でここまで子どもを痛めつけなきゃならないのか、という怒りさえ持つようになりました。¹⁰

3 不登校と「work」

山田は1991年に「学校に行かない子と親の会（大阪）」を立ち上げた。その契機は京都の「学校に行かない子と親の会」に参加したことである。当時、中学校と高校の教員懇談会に参加した山田は、中学校教員が高校に進学しない生徒を高校に「行けない」「かわいそう」と捉えることに違和感を覚えた（山田1998）。数日後、京都の「学校に行かない子と親の会」の開催案内を新聞で見つけ、世話人に電話すると「学

9 2016年度第2回臨床教育研究懇談会における山田の発言。

10 同上。

校に行けない、かわいそうな子を、なんとか行けるようにしてやろうという会ではありません。「行かない」という子どもの選択を正当に受けとめようという考え方を基本にしています」という説明があった（山田 1998, p.197）。この趣旨に賛同した山田は京都の「学校に行かない子と親の会」に通った後、「学校に行かない子と親の会（大阪）」を立ち上げるようになった。同会では、専門家に答えを求めるのではなく、当事者自身が問題に向きあうことが最重要視され、子どもは大人によって善導されるべき存在ではないと考えられている（田中編 2017）。

教師に反発する「野郎ども」と、学校に行かない子どもたちは、まったく違うようにも思われるが、山田の経験に即して考えるならば、彼らは学校教育から距離を取ろうとしている点で共通点があり、学問の世界から労働の世界へと進んだ山田の軌跡とも重なる。山田にとって「野郎ども」は、職業選択の幅を自ら狭めてしまう、かわいそうな愚か者たちではない。『ハマータウンの野郎ども』の「訳者あとがき」では、つぎのように指摘されている。

共訳者の共通する思いを述べるならば、イギリスの〈野郎ども〉は、学校から「落ちこぼれ」でも、職業世界に根づいている（遅しきも退嬰もあわせもつ）労働者階級の文化に抱擁されて、それなりに屈せずやっけてゆく。しかし日本の生徒たちは、ひとたび学校教育から脱落すれば、すなわち「勉強して下積みでない仕事につく」という「順接」に失敗すれば、「無階級」をたてまえとする国柄であるだけに、みずからの労働生活を支えるに足る「対抗文化」^{カウンター・カルチャー}をどこにも見い出せないまま、劣等感にさいなまれることになるのではないか。そういう思いを禁じえないのである。日本の若者が〈野郎ども〉を真似る必要こそないが、いまひとつの「学びかた」^{マナブカタ}「働きかた」^{マシカタ}を模索しなければならぬと痛感する。（熊沢・山田 1985, p.390）

「学びかた」と「働きかた」の双方に「ワーク」(work)とルビが振られていることに注意したい。「学ぶ」と「働く」は別物ではない¹¹。

山田の問題意識においては、不登校とは「学ぶ」と「働く」の関係性、つまり「work」の失調なのである。かつては「学ぶ」と「働く」は生活のなかで結びついてきたが、「手の労働」(manual labour)の衰退とともに分離され、「学ぶ」は四角い学

11 「訳者あとがき」では、『ハマータウンの野郎ども』の原題 *Learning to Labour* の「Learning」と「Labour」の関係性について詳しく述べられている。

校のなかに囲い込まれてしまったと考えられているのである。

4 『ハマータウンの野郎ども』をどう読むか

『ハマータウンの野郎ども』は魅力的なテキストであり、さまざまな読み方がある。山崎（2000）などのようにカルチュラル・スタディーズの文脈を重視する読解もあるが、教育社会学領域では再生産論として読まれることが多いように思われる。2000年頃以降、非正規雇用に就く日本の若者たちと『ハマータウンの野郎ども』との類似性が強調されるようになったと指摘されている（大前・石黒・知念 2015）。

しかし、「ハマータウンの雇用状況は比較的安定」（Willis 1977 = 1985, p.14）しており、「野郎ども」は苦勞なく労働への移行を果たしていた。また、金槌の町（Hammertown）の「野郎ども」が製造業に従事していたのに対し、現代日本の非正規雇用は主としてサービス業である。

日本における社会的排除と『ハマータウンの野郎ども』における階級の再生産を同列に論じることは適切ではないだろう。なぜなら、社会的排除が解決されるべき課題である一方、労働者階級は——たとえ限界があったとしても——ウィリスを含むカルチュラル・スタディーズの研究者たちが依拠するものであったからである。ターナーは、つぎのように『ハマータウンの野郎ども』における階級の重要性を指摘している。

英国のカルチュラル・スタディーズが、「階級」と「文化」の概念を緊密に結びあわせ、それと関連して、労働者階級の文化の分析に傾倒してきた過程をあとづけるのは困難なことではあるまい。ホガートによる戦前の英国における日常生活の個人史、ウィリアムズによる人類学的な「生活の全体的なあり方」へと向けた文化の定義の戦略的な再方向づけ、トムソンによる「下からの歴史」の回復、これらはみな（ウィリアムズの場合は暗示的な仕方ではあるけれども）、新たに労働者階級の文化に着目しながら、階級を、カルチュラル・スタディーズの中心においている。そしてまた、一九七〇年代以降試みられたさまざまな重要な企て、すなわち、CCCSの論文集である『儀礼を通じた抵抗』と『労働者階級の文化』や、ポール・ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』も、同様である。（Turner 1996 = 1999, p.299）

ウィリスはバーミンガム大学 CCCS (Centre for Contemporary Cultural Studies) 所

属時に「ハマータウン」調査を実施しており、CCCSの *Working Papers in Cultural Studies* no.7/8 として1975年に刊行された『儀礼を通じた抵抗』(*Resistance through Rituals: Youth Subcultures in Post-War Britain*)、1979年刊行の『労働者階級の文化』(*Working Class Culture: Studies in History and Theory*)に共著者として参加していることに留意しなければならない¹²。

山田の読解は、この系譜に位置づけることができるだろう。『ハマータウンの野郎ども』の「訳者あとがき」は、「野郎ども」に好意的な印象を与える。山田にとって「野郎ども」とは、彼が接したかつての工業高校定時制課程の生徒たちであり、板金を通して多くを学んだ彼もまた「野郎ども」の一人である。

テキストをどう読むかは読者の自由であり、訳者の問題意識が読解を制約するわけではない。しかし、そのテキストがどのようにして異文化に紹介されたかを考えるにあたっては訳者の問題意識は重要であり、それを踏まえることでより深く読み込むことも可能になるのではないだろうか。

12 CCCSの初代所長であったリチャード・ホガートは、労働者階級文化の研究(Hoggart 1957 = 1974)で知られていることも付記しておく。ホガートとCCCSについてはパーミンガム大学のウェブサイトを参照。<https://www.birmingham.ac.uk/research/perspective/richard-hoggart-connell-and-hilton.aspx>

なお、ホガートの異動により1年間だけであったが、ウィリスの当初の指導教員はホガートであった(Mills and Gibb 2001, p.394)。

【引用文献】

- Billingsley, P., 1988, *Bandits in Republican China*, Stanford University Press., (= 1994, 山田潤訳『匪賊——近代中国の辺境と中央』筑摩書房).
- Hoggart, R., 1957, *The Uses of Literacy*, Chatto and Windus., (= 1974, 香内三郎訳『読み書き能力の効用』晶文社).
- Humphries, S., 1981, *Hooligans or Rebels?: An Oral History of Working-Class Childhood and Youth 1889-1939*, Basil Blackwell., (= 1990, 山田潤・P・ピリングズリー・呉宏明監訳『大英帝国の子どもたち——聞き取りによる非行と抵抗の社会史』柘植書房).
- 熊沢誠, 2016, 「若年女性の現実と向きあい、「就労支援」の意味や枠組みを探る」『職場の人権』96, pp.60-62.
- 熊沢誠・山田潤, 1985, 「訳者あとがき」P. ウィリス『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗・労働への順応』筑摩書房, pp.385-391.
- Mills, D. and Gibb, R., 2001, “Centre” and Periphery: An Interview with Paul Willis, *Cultural Anthropology*, 16(3), pp.388-414.
- 大前敦己・石黒万里子・知念渉, 2015, 「文化的再生産をめぐる経験論的研究の展開」『教育社会学研究』97, pp.125-164.
- 田中佑弥編, 2017, 『「学校に行かない子と親の会（大阪）」の25年』武庫川女子大学教育研究所.
- Turner, G., 1996, *British Cultural Studies: An Introduction*, second edition, Routledge., (= 1999, 溝上由紀・毛利嘉孝ほか訳『カルチュラル・スタディーズ入門——理論と英国での発展』作品社).
- Willis, P., 1977, *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Saxon House., (= 1985, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗・労働への順応』筑摩書房).
- 山田潤, 1977, 「町の板金工場から」『月刊労働問題』233, pp.45-53.
- 1998, 「学校に「行かない」子どもたち——〈親の会〉が問いかけていること」佐伯胖ほか編『いじめと不登校』岩波書店, pp.187-208.
- 2011, 「「教育」ではないまず「仕事」だ」『社会臨床雑誌』19(2), pp.38-56.
- 2016, 「〈ハマータウン〉から40年——「学校から職場への移行」の何が問題か」『職場の人権』96, pp.48-59.
- 2017, 「教室から職場への移行——なにがほんとうの問題か」『臨床教育学研究』23, pp.23-34.

山崎鎮親, 2000, 「〈教育〉 実践としてのハマータウン調査——イギリス・サブカルチャー理論史研究：1970年代（その2）」『〈教育と社会〉 研究』10, pp.29-37.